

---

**あなたは必ず、今の私を好きになる**

シャッフル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなたは必ず、今の私を好きになる

### 【Nコード】

N4281J

### 【作者名】

シャツフル

### 【あらすじ】

今日からまた、平凡な毎日が始まるうとしている  
でもその日、彼は二人の少女に出逢う  
突然の転校生と口の悪い下級生  
そこから、彼の物語が少しずつ動き始める  
けれど、彼はただのインターロード  
しかし、彼は物語の鍵を握る人  
きつと本人の気づかないうちに事に巻き込まれ  
きつと自分の決断に苦悩する

これは、そんな端役でしかないはずの、なのに核心に位置してしま  
うことになる、一人の少年の物語

## 登場人物紹介

### 登場人物紹介

名前 天風 宗馬 (あまかぜ そうま)

年齢 18歳

性別 男性

鴉ときみ視高校に通う学生で、今は高校の近くのアパートで一人暮らしをしている。来年に受験を控え、今は勉強漬けの毎日。また、常時金欠のため、日々常に節約を心がけずにはいられない苦学生でもある。それもあってか料理は得意で、いかにして安く美味しく作れるかに心血を注いでいる。両親を幼い頃に事故で亡くし、それ以来、親戚の君塚の家にお世話になってきた経緯があり、いずれその恩を返したいと考えている

最近欲しいもの 経済的余裕と彼女

名前 君塚 歩美 (きみづか あゆみ)

年齢 16歳

性別 女性

宗馬がお世話になっている君塚の家の娘。宗馬とは兄妹のような関係で仲も良い。ただ、若干甘えん気質な面があり、宗馬が家を出た当初からずっと家に帰ってくるようにと言い続け、もはや説得するのが日課にすらなっている。また、運動は得意なはずのだが、何か声楽部に所属し、その所為なのか、やたらと声大きい。元気がとりえの宗馬大好き子。ただその感情が兄として家族愛なのか、それとも異性への愛情なのか分からないらしく、自分でも少し悩んでいたりする

最近の願い 宗馬が家に帰ってきてくれること

名前 神無月 天音 (かんなづき あまね)

年齢 17歳

性別 女性

もうすぐ受験だというのにも関わらず、高校3年の秋に転校するこ

とになった間の悪い女の子。ただ、噂によると成績は良いらしく、しかも、つい見惚れてしまいたくなるほどに容姿は端麗でスタイルも抜群。しかも運動も出来るようで、基本能力については見事なまでの完璧超人。対人関係も良好で、二日にしてクラスの半分と打ち解けてみせた凄い人。それに何故か、転校当初から宗馬に対しては特に親しげな態度をとるような節がある。ついでに言えばブルジョアジー

最近の My Favorite Cooking!

名前 空知 翼 (そらち つばさ)

年齢 17歳

性別 女性

宗馬と同じ鶉視高校に通う二年生。普段から服をだぼつと着ることが多く、宗馬からはだらしないと評されている。口が悪く、気に入らない相手に対して容赦なく皮肉を並べ立て撃墜することもしばしば。歩美とはクラスメイトであり、彼女とずっと仲良くしていきたいと考えている。宗馬と同じく一人暮らしをしており、熾烈を極める商店街のタイムサービスでの買い物において、ここ最近は無敗記録を重ね続けている。困ったときや、言葉を選ぶ時など前髪をいじる癖あり。

最近の好きな場所 学校の屋上

名前 君塚 聡 (きみづか さとし)

年齢 41歳

性別 男性

宗馬の親戚のおじさん。身寄りを亡くした宗馬を引き取って育ててくれた好人物。宗馬のことも自分の息子のように可愛がっている。家族を第一にをモットーに日々をガツガツ生きる気の良い親父さん。もちろん娘である歩美も大事に思っていて、親として当然のように歩美には幸せになってもらいたいと考えている。歩美の気持ちに気づいており、その願いを叶えるために色々と画策中。ついでに宗馬から親父と呼ばれたらしく、同様の意味において色々画策中。ただそのベクトルは微妙にズレている

最近の狙い目 風呂

名前 君塚 里美 (きみづか さとみ)

年齢 42歳

性別 女性

宗馬の親戚のおばさん。宗馬の母親の妹にあたる人で、宗馬を引き取る事を最初に提案した慈愛の人。ガーデニングが趣味で家の庭にて、様々な花やらハーブやらを育てている。ただ、熱を入れ過ぎの感があり、迂闊に庭に触ろうものなら笑顔で脅迫してくる怖い人。と言っても、基本的には優しいお母さんであり、聡と同じく家族を一番に考えている。ただ、家での実権は彼女の手であり誰も逆らえない。実は宗馬の初恋の人

最近やってみたい事 ビニルハウス（大きなものがいいわねえ）  
を作りたい

名前 板倉 健吾（いたくら けんご）

年齢 18歳

性別 男性

宗馬の悪友。調子に乗った阿呆。以上！

最近言った言葉 「えっ！？なんでよっ！！」

どうして . . .

もう嫌だよ . . .

こんなの、辛過ぎるよ . . .

私は、もう . . .

あなたを忘れたのに . . .

もう、あなたと関わりたくなってるのに . . .

ねえ、宗馬？私たち、どうしてまた、愛し合っちゃったのかな？

『あなたは必ず、今の私を好きになる』

「あ．．．」

朝日に、目が覚めた

ぼんやりしたまま手元の時計を見ると、時間は6時半を指している

．．．いつもの時間よりも大分早い

このまま用意して出れば、余裕で1時間以上の余裕を残して登校できるくらいの時間だ

まったく、何でこんなに朝早くに．．．

「って、あゝ、そっか。カーテン閉めなかったんだっけ．．．」

窓の方を見やると、そこには開いたままのカーテンと、その奥の明るい日差し

外ではいつものように、朝のスズメが高く短い声でさえずっている  
さわやかな朝と言えない事もないが、その眩しい光のせいでこちらかなりの睡眠不足に陥っている

受験勉強中なのだからそれくらい当然なのだが、朝の貴重な睡眠時間を潰されたような心持になってしまい、正直気分は悪かった

改めて布団の中に入れていいのかもしれないが、それもまた今更感があつて悔しい

「でも、うーん、なんだろうな．．．それとは別に、何かちょっとダルい気がする．．．」

でもまあ、それは完全に自業自得か

というのも昨日は、勉強したままの体勢で、つい机に突っ伏して落ちてしまったのだ

おかげで節々が硬くて仕方がない

ああ、でも昨日歩美の奴に、強引に買い物につき合わされたのもあるかもしれない

まあ、それについては、後で文句を言っておくことにしよう

「．．．それに、夢見も悪かったような気がする．．．」

どんな夢だったかは忘れたが、どうせまた悪夢だったのだろう

人の見る夢の、その殆どが悪夢だと言っし

その夢と体のダルさとが関係あるかは知らないが、とにかく気分は良くない

「はあ、とにかく飯だ飯。せつかく起きたんだから、さつさと作っちゃまおう」

そう自分に言い聞かせるように、俺はイスから腰を上げる

こういう時は、むしろ体を動かしていたほうが楽になるものだ

カタン、とイスの脚がフローリングを叩く音と共に、俺は今日、初めての一歩を踏み出した

「あゝ、何にしようか。米・・・は昨日食っちゃったな・・・ちっ、じゃあトーストか・・・」

こういう時、誰かが飯を作ってくれたらいいのに、なんて妄想をすたくなる

両親なんてものがないから、これまた当然なのだがやはり一々面倒臭い

こんなことを言うと、歩美の奴がいつも以上にやかましくなるかもしれないが、朝くらいは別にいいだろう

まあ、どちらにせよ、朝飯を食わないことには昼まで持ちそうになるということは、この体が嫌味に腹を鳴らして教えてくれている

だったら、さつさと用意してしまおう

「トースト2枚にスクランブル。ツナとトマトとレタスのサラダ、あゝ、ついでだからコーヒーストを豆から入れるか・・・」

そんなことを一人ごち、すぐ側にある、整頓されたシステムキッチンに足を踏み入れて、そのコンロにボツと青い色の火をつけた

あまかせ そうま  
天風宗馬 18歳

来年の冬に受験を控えている高校3年生

両親とは子供の頃に死別

中学卒業までは親戚の家に厄介になっていたが、現在はそこそ新しく、そこそ綺麗なワンルームマンションを借りてそこに住んでいる

高校の近くの、かつ3口コンロのシステムキッチン付き1Kを探すのには大変苦労したが、その甲斐あってか、そこそ充実した毎日を送れていると思う

人間の基本はやっぱり食事だよな〜と思う、今日この頃である

まあ、両親の遺産を削りながらの毎日で、将来は非常に心もとないのだが、それでも、バイトをしながらどうにか自分を維持できているってのが実情

とはいえ、受験を控えているので、いい加減に休みを貰わないと、そろそろ危ないかもしれないのが最近の悩みと言えば悩み

ちなみにこの前の模試での偏差値は58

悪くはないが、際立っていいという訳でもない成績

これならいつそ就職しようか、なんてことが頭をよぎらないでもないのだが、君塚のおじさんおばさんに、大学は出るようにと念を押されている

それを条件に一人暮らしを許してもらったのだし

あとは、この夏までは剣道部所属も、現在は引退し日々を勉強に明け暮れる毎日を送っている、と・・・

なんて、意味もなく自分のプロフィールを並べ立ててみた

ホント意味はない

何となくだ

ただ何となくそうしなければならぬような気がしただけ

ああ、あと、ルックスについて特に言及はしない

生憎と、そんな自信のあるものじゃないのだ

「そ~~~~ま~~~~!!」

と、そこに、やたらと聞き覚えのある声が、俺の横を通り抜ける

そのあつという間に通り抜けたバカでかいその声は、間違いなくあいつのもの

いやもう聞きなれすぎて答えを外すこともできやしない

という訳で、ここはあえて無視することにする

「そ~~~~~ま~~~~~つ!!!!!!」

そもそもこいつは、いつになったら天下の往来で人の名前を叫ぶ、  
なんて蛮行を止めてくれるのだろうか

もうほとんど拷問のそれだ

頼むから、というか実際に言っているのだが、いい加減、時と場所  
と場合と年齢と体裁つてのを考えて欲しいものだ

「ていつ!?!」

「うがつ!?!」

とか何とか考えている間に、今日もまた飛び蹴りを喰らってしまっ  
ている俺がそこにいた

その全体重を乗せた一撃は、安易容易に俺の体を吹っ飛ばしてくれる  
注視してちゃんと避ければいいものを、俺は敢え無く、天下の往来  
に四つん這いになって倒れて伏してしまう

「よしっ、今日は直撃! 80点!」

って、お前は何様なんだっ

「で、宗馬!?! 何でいつつも無視すんのさ! いい加減酷いって思わ

「ないの!？」

「そう言いながら、腰に両手を当てて偉そうにふんぞり返っているぞ  
いつ

「それが、人に蹴りに入れて、まして点数までつける奴の態度なのだ  
ろうか

「何て体育会系な奴だ

「やかましいっ!いつつも俺の背中にスタンプ叩き込むバカが酷い  
なんて言葉使ってんじゃねえ!」

「俺はすぐさま起き上がり、その横柄な女を睨み付けてやる

「仕方ないじゃない!宗馬ってば、こうでもしないと私のこと無視  
し続けるんだもん!」

「普通に側に来て普通に声をかければ俺だつてちゃんと振り向くわ  
っ!それを毎度毎度わざわざ遠くからあんな馬鹿でかい声で叫んだ  
あげく蹴りかますなんてどういふ神経してんだお前はっ!」

「それは仕方ないでしょ!？宗馬は無視するし、私、声楽部なんだ  
から!」

「いや、それは全然まったく仕方ないだろうが!つか何で声楽  
なんだよ!お前どう見ても運動部系だろうが!」

「実際相当に得意だったはずだし

「そんなの別にいいでしょっ！それに私は宗馬の幼馴染でいところで、ちよつと前まで一緒に暮らしてた家族なんだからっ！だったら宗馬のことを気にするのは当然じゃないっ！」

「今は違っつ！それにわざわざ俺のことなんて気にすんな！そりゃ、君塚さんには感謝してるけど、俺はもう独り暮らししてんだ！ちよつとは勝手させるよ！」

「けどそれでも家族は家族だもん！私にとって、宗馬は宗馬だもん！」

「だからそれが意味分かんねえっつの！！！」

「分かんないもんっ！！！」

「分からねえよっ！！！」

「う~~~~！！！」

「ぐ~~~~！！！」

そんなこんなで、道端で睨み合う二人

もう完全にいつも通りの兄妹喧嘩だ

まあ、昔からこんな調子でやってきたから、仕方がないと言えば仕方がないのだけど……

で、こいつは君塚歩美きみづか あゆみ

君塚のおじさん、つまり俺がちょっと前まで厄介になっていた親戚の家の娘さんにあたる

歳は、俺の1個下で現在、同じ高校の2年生

何が面白いのか、わざわざ俺と同じ高校に入学してきやがったという物好きだ

ついでに、毎度毎度ホント勘弁して欲しいのだが、俺が一人暮らしをし始めてからというもの、何かにつけて俺にちょっかい出してくる厄介な相手でもある

「分かってるの？宗馬もうすぐ受験なんだよ！？だったら一度家に戻って、ちゃんと準備しないとっ！」

「大丈夫だよ！ちゃんと勉強はできてるし、今はもうちゃんと飯も食べてる。掃除とかもしてるし、だからそんな心配すんなって！」

「でもでも、それだと大変でしょ！？お母さんなら気にしないでいって言ってくれてるし、それに家賃だって勿体無いじゃないのよ違うー！？」

「ちゃんとバイトしてるからそれも問題ない！というかお前だって分かってるだろ？俺がこれ以上君塚さんに迷惑かけたくないってのはさー！」

今まであれだけ世話になった挙句、全額ではないにしろ、今も学費やら何やら色々と援助してもらっている

正直助かっているが、それでももうこれ以上、おじさん達には負担

をかけたくない

「それは私も言ってるでしょ！？そんなの宗馬の気の使いすぎだつて！！第一バイトだって結構シフトいれて無理してるくせにっ！」

「もう無理はしてない！それにもうすぐ休みを貰うつもりだ！大体俺は嫌なんだよっ！お前んところが嫌いとかじゃなくて、誰かの厄介になってる自分が！」

「・・・それは聞いたけど・・・でも、それだって大学入学までの間なんだよ！？それだけなんだよ？もうそれだけしかもう側にいられないんだよ？それをねえ宗馬分かってる！？？」

「・・・だからそれはっ！」

「もう時間なんて、全然残ってなくて、もうすぐお別れで・・・だから私は毎日こうして・・・」

見る間にテンションが下がっていく歩美

この話をするといつもそうだ

平行線のまま、決まってここに行き着いちゃう

いつつもいつつも本当に難儀な奴だ

俺なんかのために、そんな一々頑張らなくてもいいだろうに

「・・・それももう何度も話し合っただろ？お前が淋しいってのは前に聞いたけど、でもだからこそ週末はちゃんとお前の家に行ってる。

お前の相手だつて、できる限りでしてつもりだ。お前的に足りないかは分からないけど、それでも俺的には、結構な妥協なんだぜ？」

これは歩美が高1の頃からの話だが、けれど週末のそれは今も途切れることなく続いている

何だかんだ言つて歩美には世話になつてるし、それにもちろん大事にも思つている

そんな妹みたいな奴を、俺だつてやつぱり傷つけたくはない

「何度も聞いたよそんなの．．．でも、それでも私は、やつぱり宗馬にはもつと家にいて欲しいんだ．．．」

「歩美．．．」

まったく、こいつは．．．いつまで甘つたれなんだよ

未だにどっか子供っぽい考えしてるし

「そんなわがまま言つなつて。俺たちは家族だろ？ だったら、いつか俺が家を出るなんて、そんなの普通のことだろうが」

「そうだけど、そういうものだと思うけど．．．」

「それに、歩美が何言つても、俺はこれ以上変えるつもりはない。このまま勉強して、それなりの大学に行く。そんで一人前になつて、絶対に、歩美や君塚のおじさん達に恩返しするんだ」

君塚のおじさんおばさんには、もう数え切れない恩義がある

もちろん歩美にも何度も助けてもらってきた

三人とも、両親を亡くして沈んでいた俺を、これまでずっと支えてきてくれた

確かに、それだけ世話になってきたのだから、歩美のこんなお願いくらい聞いてもいいような気がするが、でもそれじゃ、俺には暖か過ぎる

みんな優し過ぎて、なのに何も出来ない自分が悔しくて仕方がない  
だったら俺は、少しでも早くにちゃんと一人で生きられるように、  
それに報いる努力をしないとイケないんだ

「ふん、何が恩返しよ。それならもっといい大学に行ってみるってのよ……」

「つく、余計なお世話だ。そこそこ名前の知れてる大学狙ってるっての」

「ホントにそこそこでしょうが……宗馬なら、もっと上のとこ狙えてた筈なのに……」

「……んなの無理さ。俺の頭じゃ、はなっから偏差値60台前半の大学が精々だよ」

「……うそつき」

「お前こそ身内を贖目に見すぎなんだよ。俺は普通にこんなもん

さ．．．って、そろそろ時間が。とにかく行くぞ。登校には丁度いい時間だ」

ほぼ毎日こんな調子だからケンカの時間を加味して登校しないといけない

まったくもって面倒な話だ

「ふんっだ．．．宗馬のその、いつつも色んな計算してるとこ、私、嫌いだ」

「そうかい。でも俺は受験生だからな。やっぱり内申だかを気にしなくちゃいけないんだって」

「ふん、うそつき」

「嘘なもんか」

「うそだよ．．．」

（私の遅刻なんて、そんなのどうでもいいじゃないの）

「あ？何か言ったか？」

「別に！ほら宗馬！早く行くよ！」

そう言っつて、歩美は高校までの道のりを駆けていく

さっきまでの怒り顔も寂しげな顔はどこへやらだ

まったく何て変わり身の早さだろう

ある意味では、女らしいと言えば女らしいと言えるのかもしいれない  
でもまあ、これももう何度も繰り返してきたやり取り

それもあと数ヶ月と思えば、まあ付き合ってやらなくもないと思っ  
てしまう

「やれやれ、兄貴ってのは、ホント面倒な役回りだ」

なんて思ってもいない事を口にして、俺は我が愛すべき妹の後を追っ  
そうして今日も、いつもの高校生活を始まるうとしていた

「ふう．．．」

自分の席に着き、軽く息をつく

今日もどうにか歩美を遅刻はさせずに済んだ

あいつは気づいてないと思うが、それくらいの兄貴らしいことくらいしてやらないとな、なんて思っている

それに、俺のせいで遅刻の常習犯じゃやっぱり気は重いし

というか、君塚の家を出た当初、ホントにいつつも遅刻させてしまっていたので、その罪滅ぼしでもあったりする

てか、もう学校が違うのに、アパートの前で待ち構えてるなんて、どういう根性をしているのだろう、と不思議に思ったくらいだ

まあ、同じ高校に通うようになったので、今はこうして、何とか日々を無事に過ごせてるけど

「．．．．．で、なんで俺の隣に、新しく席が出来てんだ？」

意識しないようにしていたが、気になるものは気になってしまう

確か俺の隣には、つい昨日まで席なんてなかったはずだ

夢でも見ていない限り間違える筈もない

掃除のときのミスなのか、それとも新卒の嫌がらせなのか

「おい天風！知ってるか！？」

と、そこに嫌がらせ容疑者最有力の阿呆が現れる

「・・・相変わらず、第一声に挨拶が出ないな板倉」

板倉健吾いたくら けんご

腐れ縁を絵に書いたような、ただのバカ

説明はこれで十分だろう

「何言ってるやがる。今更謙虚に振舞いあう仲でもないだろ？俺達はさ」

何を今更とばかりに、肩をすくめる板倉

いや、そういう問題じゃないだろう

「お前は後で、親しき仲にも礼儀あり、って言葉を辞書で調べてレポートにして担任に提出して、「何だこれは、こんなの知らんぞ？」って呆れられてろよ阿呆」

ついでに、その出来にも反省させられてしまえ

「何だよ何だよ天風、礼儀なんてそんなのいいじゃんか。俺は気の置けない男ナンバー1を目指しているんだぜ？」

「むしろ気を置きまくりのワースト1だ、このド阿呆」

「で、だ。お前知ってるか？」

スルーしやがるかこの野郎

「何かさ。今日はウチのクラスに転校生がやってくるらしいぜ？」

「は？・・・転校生？」

思わぬ単語に、素で聞き返してしまった

「おいおいこの時期にか？もうあと少しで受験ってこの時期なのか？もう秋だぞ秋・・・一体どんな間抜けだそいつは」

親の事情だとしても、親の方で単身赴任とか何とか考えるだろ普通

いい加減、間が悪過ぎるって

てか、もし本当なら随分と子供の事を無視した考えの親だ

ああ、いや、どちらかと言うと、その話そのものが嘘臭いか

何しろ、情報源がこの馬鹿なんだし・・・って、いやいや待てよ？  
転校生？

つづことは、この隣の席でもしかして・・・って、いやいやいや  
いやでもまさかそんなはず・・・

「どうやら父子家庭って話で、だけど娘が心配でどうしても、つてのが今のところの有力候補だ。いや、なんて心配性で親バカないい親父さんなんだろうだね。およよよ、ええ話や〜」

なんだよその泣き真似は

というか、こいつは自分で言ってる、どこまで本気なのだろう

もし本気なら相当の阿呆だ

「ん？でも娘？女子なのかそいつって？」

「お？何だよ何だよ食いつきがいいじゃないのよ。さっすがジゴロ王ソーマってところか」

「・・・今すぐその腐れた称号を撤回しろ、でないとなんかここでお前のベッドの下にあるエロ本の変態的趣向をクラス中にぶちまけるぞ」

「何っ！？いや、おいおい！俺のお宝を人質、いや物質にとるつもりか卑怯だぞ！？」

「・・・いや、別に質に預かってるわけじゃなくて、この場合、被害にあつのはお前の風評なんだが」

こいつは、気にするポイントを履き違えている

もちろんお前のエロ本がどうなるかと知ったことじゃないけど

「でも天風、それだとお前だって、噂を流した張本人ってことで何かしら被害を被るんじゃないか？お前、そんなリスクをわざわざ背

「負うつもりかよ？」

へへん、裏を搔いたり〜と鼻を鳴らす阿呆

「何、俺のことは心配するな。この前お前の家に行った時、実はそのお宝の写真を数枚写メに撮って置いたんだ。で、誹謗中傷的文章は作っておいて、後はそれをクラス中に送信するだけの形にしてある。無論非通知の迷惑メールとして送る予定だ」

「．．．あ、天風お前、いつの間にそんなものを．．．ででも、迷惑メールなんて普通みんな読まないだろ？な？」

「そこはそれ。タイトルに『衝撃！鴉視とぎみ高校、3年A組、板倉健吾の知られざる性癖！』とか何とか書いておけば、送った内の何人かは興味本位で見るだろう」

噂、ゴシップは古来から続く、人の娯楽の一つだ

しかも、様々な端末が溢れるこの世界ならば、悪い噂を広げるには、そりゃもう平安時代の人もビックリなほどに怖い時代だとも思う

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

二人の間に微妙な空気が立ち込める

でも、すでに勝敗は決まっているようなもの

俺には何のスリルもない

「・・・OK。さっきのは撤回する」

「賢明だな」

当然の帰結・・・なんて

実を言えば、そんな写真は撮っていないのだけど、こいつにはこれくらいが丁度いいだろう

それに、こんなのはただのお遊びだ

きつとこいつだって、それを分かかって乗ってきている訳だし

「で？転校生の女子ってのは？」

「ん？何々、やっぱ興味ある？」

思った通りに、元の調子に戻る板倉

でもだとしても、ある意味において羨ましい性格と言えなくもない

そんな板倉に若干呆れつつも、一応「まあな」と返しておく

「そりゃな。天風だって男の子だもんな。転校生の女子って聞いて気にならない男子はそうはいないよな」

「・・・その男の子って表現は止める。何かム力つく・・・でもまあ、そこまで言われて興味を持たない方がよっぽど嘘だろ」

さつきも言ったが、人の風評やゴシップを気にしない人間なんて基本いない

もし、そんなことを問われたら、それは嘘つきか否かを聞かれているも同義だ

「でも板倉、お前よく転校生が女子だって分かったな。それともやっぱり、お前の希望的観測だったりするか？」

「いやいや、それは確か。えっと、一週間くらい前だったかな？俺担任の村瀬と校長、それとその女の子と、多分その親父さんの4人で話していると見かけたのよ。で、色々調べて見たってわけ。どうよ？俺の情報収集能力」

「・・・いや、まあ、よくやるよなお前ってさ」

こいつの好奇心というか探究心にはほとんど呆れて返ってしまっ

そういや前も、学校の七不思議なんてどうでもいいものを、元ネタから何まで徹底的に調べてたっけ

受験を前にしてドンだけ暇なんだろうか

それに、話してるとこ見たって、どうして校長室だか応接間だかをどうやって覗いてたんだよ

「おっと、情報元は訊くな？お前の命が危ない」

「・・・いや、訊かないけどさ」

訊きたくもない

ま、一応本当だとしても、情報元はどうせ先生とか、その辺りだろう  
もしそうじゃなかったら本当にヤバイ奴だ

というか、志望はマスコミ関連でもなかった筈だし、そんなところに  
心血注いでどうするんだか

「って、あ・・・」

「ともかく、女子の転校生が来るのはホント。しかも見た感じ、か  
なりの美少女・・・いやもう美女って感じだったね。ついでに情報  
によると、相当頭の良い子って話だ。どうだ？ちつとは俺の事見直  
しただろ？」

そう言って、気持ち背を反らす板倉

あんまり機会に恵まれてない分、頑張って自分を大きく見せようと  
しているのだろう

・・・不憫な奴

しかもそれも、今となってはただの裸の王様でしかない

「ああ、一応は大したもんと褒めてやらなくもないよ。でも、もう

ちょっとだけ触れ回るのが早けりゃ良かったな」

「って、何よその微妙な言い回しは．．．まるでお前の情報なんて時代遅れだと言わんばかりな感じじゃなか」

「いや、だってもう、その子そこにいるし」

「え!?!」

驚いた板倉が振り返る

いや、何とかその振り返り方が漫画だ

一瞬アムロを殴った直後のブライトさん思い出しまったよ

それに見事なまでの間の悪さも漫画っぽいし

これもある意味で言えば天性ってやつなのかもな

しなはいけど  
合掌

とまあ、そんな板倉に少しだけ同情しつつ、担任に連れられたその生徒を見る

なるほど、その第一印象は、成績の良さそうなお嬢様っぽい感じ

しかも、モデルみたいなスタイルで、相当にモテそうな顔立ちに思える

って、もう基本的な能力もう完璧じゃなか

いやいるんだね、世の中こういう人種もさ

( . . . それに )

その両目の輝きは、とても印象的に思えてしまう

気づけば、引き込まれてしまいそうなほどの瞳の色だ

例えるなら、この世の誰もが見惚れてしまうような、そんな感じさえしてしまふ

. . . なんて、それは言い過ぎにしても、確かにその目には、とても不思議な感情を抱く俺がいた

黒板の前に立つそんな彼女は、黙ったままその強い光を宿した瞳で教室全体を見据えている

「 . . . . . 」

え？

だけどふと、一瞬だけ俺と彼女の目が合った . . . そんな気がした  
実際に目が合ったかは分からないが、それでも少し驚いて目をそらしてしまふ

しかも、何となく気まずくて改めて見返すことが出来ない

いや、目が合ったただけなら、大したことじゃないのだが

ただ・・・その・・・

多分気のせいだとは、思うのだけど・・・

俺のことを見た彼女の口元が、何故か微かに笑みを浮かべてたように見えたんだ

「はじめまして。神無月かななつき天音あまねと言います。この時期の急な転校で、みなさんとは少しの間しか一緒にできませんが、それでも仲良くしてもらえると嬉しいです。どうかみなさん、よろしくお願いしますねっ」

パチパチパチパチパチ！！

「おおおっ！！天音ちゃん！なんて可愛いんだ！！君は俺のマドンナだっ！」

「・・・アホだなお前は」

拍手の中、たった一人で騒いでいる見知った我が悪友

どっただけお約束キャラなんだお前は

そんなに騒ぐ奴は、世の中そうはいないぞ？

つかマドンナって表現は、現代の高校生としてどうなんだよおい

・・・とか思いつつも、同時に、まあ板倉が騒ぐのも無理はないか、とも思う自分がいたりする

転校生の彼女、神無月さんは、さっきも思ったが確かに可愛い

というかかなりの美人

マドンナはともかく、板倉が美女と評するのも、分かるような気がする

顔立ち目鼻立ちはよく整っていて、物腰には高貴とさえ言えるオーラが感じられる

先ほどの自己紹介も相応に堂々としていて様になっていたし

それにオマケに全体を見渡す余裕があつて、かつ最後は笑顔で締めくくっている

いや、正直見事なもんだと思う

今回が急な転校だつて言うし、きっと恐らく、何度も同じような経験をしてるのだろう

でもおかげで、クラスの男連中は落ち着きがない空気に包まれてしまった感がある

いや、難儀なもんだね、この高校の男連中はさ

「そんじゃ席は・・・」

それでもそんな中、実にマイペースに事を進めようとする担任の村瀬  
周りを意に介さないというか、自己中なところは侮れない・・・っ  
て、ん？

そういえば今空いてる席ってのは・・・

「ああ、天風の隣だったな」

．．．やっぱりか

道理で新しく席が出来ているわけだ

しかも今の口調からして村瀬の野郎本人が、そう指示したんだろう

ったく、何だっつてわざわざ俺の隣にするのだろう

せつかくの後ろの角の席だったってのに

なんて、つい心中で悪態を付いてしまう

．．．いや、嘘だ

実はちょっと嬉しかったりしている

ありがとう村瀬、初めてあんたに感謝したよ

でもその神無月さんが俺の考えなど分かるわけもなく、大人しく担任の指示に従って、軽やかにこちらに近づいてきている

．．．つい『軽やか』に、なんて使ってしまうほど、その振る舞いが美しいのはなぜだろう？

ともかく彼女は、俺の隣の新しい席に座ったかと思うと、すぐにこちらを向いて

「天風君、だよな。これからよろしくね」

なんて、例のつい見惚れてしまうような瞳と表情で、俺に笑いかけ  
てくれていた

む

かなり可愛い

対する俺は、その可愛い笑顔に、思わず顔が赤くなってしまったん  
じゃないか、と思いつつ

「あ、ああ、よろしく・・・」

なんて、ちょっと強張ったような顔をして答えていた

こうしてその日、俺の隣の席に、新しいクラスメイトができた

その日はそのまま何もなく過ぎていった

もう、至ってどこまでも普通に普通

お隣さんに転校生が来たって、別に何のことはなかった

休み時間中は多少うるさかったが、それも別段気にするほどでもな  
く、その日は淡々と過ぎていく

もう実に平穩

そりゃ俺も、それなりには神無月さんと言葉を交わしたし、教科書のない彼女に自分のを見せたりした

移動教室の時は簡単に説明して、でも結局は一緒に向かうことになったりもした

でも、それだけ

普通に話して、普通に話題を振って、普通に会話を楽しんだくらい  
早々恋愛的な展開が発生するなんてことありゃしない

．．．いや、まあそりゃもう当然すぎるくらい当然なんだけどね？

でも、朝の笑顔とかを見て、つい少しばかり期待してしまうのも、それも仕方のないことだと思わないか？

．．．つつても、俺はやっぱり受験生で、どうしたって忙しいわけだし、そもそも女の子が得意というわけでもない

それを急に誰かと仲良くなるうだなんて、それこそ虫のいい話なんだろう

まあせめて、彼女とは同じ学年のクラスメイトとして、今後とも普通に仲良くやっていくことになるのが関の山か

「ふう．．．」

で、今は授業を終えて下校途中

俺は、朝とは逆になっただけの道のりを、ただのんびりと歩いていた空を見れば、太陽はもうすでに白からオレンジに変わり始め、雲もすでに青みがかっており、この後に訪れる夜の準備をし始めている昔は、こんな空の中ですら、まだ友達連中と走り回っていたことを思い出す

でも、それは一瞬

今の俺は、この後すぐに、夕飯の買い物に馳せ参じなければならぬい身の上なのだ

こちらら貧乏暇なし高校生

昔を懐かしむ余裕などありやしない

まあ、下校途中に商店街があるのは助かるのだが、自分の年齢を鑑みて、何とも複雑な心境だったりもする

ちなみに、その商店街のスーパーが、そろそろタイムサービス迎えることとなっている

今日の狙い目は豚肉だ

いつもは値段的に鶏肉ばかりなのだが、それだけじゃ飽きるので、たまにだけは豚肉にしている

笑うなら笑え、どうせ牛肉はメニューに入っていないさ！

てことで、今日のおかずはバラ肉使って生姜焼きに決定

作るのは楽だけど、結構好きなので問題なし

そこそ安くて簡単で、かつ美味しいのなら、基本是非もないだろう

「・・・なんだかなあ」

そんなこと、考えてる時点で、我ながら所帯じみた高校生だと思わなくもないが、でもこれも生活のためだ仕方ない

「今日の買い物は500円以下。それで一週間はもたせるぜっ」

残りの食材を考えればそれで十分に保つ

いや、保たせて見せる

多少腐っていようがお構いなしで食ってやるっ！

微妙に極貧生活に突入する予定なので、どうしても贅沢は出来ないのだっ！

そしてもちろん、今日もチラシを隅から隅までチェック済み（時事問題対策含め新聞はとっている）

目的のブツを幾つかのスーパーと専門店を回り、一番安いところでゲットするのが今日の急務

あの、壮絶な主婦の皆様との攻防を如何にしてかいくぐれるかが、最近の一番体力を使う瞬間なのだ

でも、それでもたまに、惣菜を買ったとか牛丼チェーン店で食ったほうが安いときがあつて、それに気づいたときなんて、非常にむなし気持ちになつたりするんだよね・・・

ちなみに100均はお得意さま

バナナは仏様に匹敵する存在だ

あの安さと栄養価の高さは侮れないものがある

ついでに言えば、本当に美味しいものを食べた時なんか、その料理と結婚して言いとさえ思っていたりする

この前、ふと立ち寄った洋食屋のサクサクのエビフライには、ものの見事に心を奪われたものだ

是非、あの技術を盗んでみたいものである

「つと、到着」

とか何とか胡乱なことを考えてる内に、第一の難関、その名も丸特スーパーに到着する

時計を見ると、後10分程度でタイムサービスが開始することを示していた

周囲を見回せば、やはりタイムサービス狙いの奥様方が、目の奥にキラキラした何かを抱えているのが分かる

もう皆さん既に蛇の目状態だ

だが、今日の俺はそんなものに怯んだりはいしない

「よしっ！今日も錦を飾ってやるぜ！」

俺は拳を握りしめ、意気揚々とその自動ドアを潜っていく

相手が蛇なら、あたかも鳥のように奪い去ってやるうと心に決めるのだった

「くあ、敗北した・・・」

最後の激安専門店の横で、ひっそりと四つん這いになって倒れている俺

自分でも、もう見るに耐えない哀れさを醸し出していると思う

当初、蛇に睨まれた蛙を意識して、逆に鳥のように・・・なんてことを考えていたが、今日に関しては鳥どころか蛙にも届かず、もはや蛇につぶされたアリンコ状態だった

手の中には、敗北の証たる幾つかのビニル袋

その中には、確かに目的の食材達があるのだが、しかしその内訳があまりに散々

豚肉 2番目に安いところ (+33円)

たまねぎ5個 2番目に安いところ (+8円)

キャベツ半玉 3番目に安いところ (+21円)

トマト4個 2番目に安いところ (+15円)

計77円のプラス

合計すれば、それだけで500円に届く勢い

「くっ．．．しかも卵は買うことができなかった．．．」

もう押しのけられて押しのけられて、その怒号の中に入ることすら敵わなかった

荒れ狂う大波に揺られ揉まれもう踏まれまくっていた

というか、この街の皆さんは、何ゆえこんなにもアグレッシブなのだろう

正直、常軌を逸していると思う

「．．．仕方ない。卵はまた明日買いに来よう。まあ、安いのが出

てれば、の話だけど・・・」

と、そこに誰かの影が、四つん這いになった俺の手元に伸びてきたことに気づく

ふと、見上げてしまう

というか、こんな敗北者丸出しの格好のままなのに、素で見上げてしまった

なんて間抜け

もう哀れさここに極まれりである

でも、見上げた後では後悔しても、もう遅い

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ともかくそこには、俺の事を見下ろしている、見も知らない女の子が佇んでいた

思わずその姿に見入ってしまったが、彼女はオレンジの夕日を背にし、こちらからはその逆光でその顔を伺うことはできない

けれど、そのシルエットには少しだらしない感じが漂っているのが分かる

別に着ているものが粗末という事ではなく、服の着方や立ち振る舞いという意味で少しだらしないのだ

しかも、この黄昏の中にあると、その影からすら虚ろな色を感じ取れてしまう

いやもう、シルエットそれだけで、どこか無気力にも見えてしまうような・・・

そんな今時らしくない、不思議な女の子が一人きりで佇んでいた

「ふっ . . . .」

その子の第一声は、俺を蔑んだような笑い声だった

つか、鼻で笑われた

いや、もう思いっつきり見下されていた

「くっ!」

一瞬にして、額に青筋が走る

どうやら同年か年下であろう女の子に見下されて、それで腹の立たない奴はそうはいない

だから、ちょっとヒトコト言ってやるうと思ったのだが

「って、あゝ!」

だがそれよりも、あまりに驚くべきものが目の前にぶら下がっている事に気づく

だってそこには . . . .

丸特スーパーのビニル袋に入った豚肉とたまねぎ

八百吉のものであろう半玉キャベツとトマト

そして、この激安専門店、一安の袋に入った卵一パック・・・  
俺の買えなかった・・・卵、1パック・・・

という、本来なら今日、この俺の買うはずだった商品達・・・  
って、何で全部俺と買うものかぶってるんだコイツはっ!？

俺に対する当て付けなのかつ!？

「そ、それは・・・まさか・・・」

声が心なし震えてしまうほど動揺している俺

だって、あの戦場とも言える店の中で、こんな女の子が生き残れる  
なんて、正直信じられない

「ええ。これは間違いなく、この私が『勝ち取った』商品よ」

「くっ!」

そして、親切にも俺の疑問を悟って、わざわざご丁寧とその正解を  
教えてくれる女の子

つか、敢えて勝ち取ったことを強調してって言いやがったなコイツ

「ボソっ・・・(負け犬ね)」

「っ!?!?」

今コイツ人のこと負け犬って言わなかったか!?

しかもボソツと見下して笑みを浮かべて斜めからっ!

「てめえっ!!」

すぐさま立ち上がり・・・

というかようやく立ち上がり、そのム力つくだらしのない女を見据えてやる

背はこっちの方が高く、それを利用して今度は逆に見下ろしてやった

だが、そんなことはコイツにとって気に留めることでもないようだ

「何?キレたの?まるでどっかのSF映画の主人公みたいな人ね・・・

・よっぽどへヴィな性格でもしてるのかしら」

なんて挑発じみた言葉を俺に返してきやがった

「くっ!お前なあっ!」

初対面早々見下されて、かつ負け犬呼ばわりされて、オマケに妙な例えでバカにされて、これで怒鳴るなど言うほうが無理だ

「あゝ怖い怖い。年下の女の子相手に本気でキレてるわこの人。サ  
イテ〜ね」

「く・・・」

いや、あまりにその通りなので、つい逆にたじろいでしまう

我ながら大人気ないと思う

でも男つてのは、基本女の子相手に強気になれない生き物なのだ仕方ないだろ？

つて、今コイツ自分で年下つて言いやがったな。つてことはやっぱり年下なのだろうか？

まあ、見た目そう見えなくもない

「それじゃサヨナラ負け犬さん。今日は、その少し高くついてしまったお肉でも食べながら、精々嘆いて喚いて自身を呪っているといわ」

「なっ!？」

何つゝ言い草だ!

高々豚肉ごときの話しで、それなのにドンだけ高飛車になれんだよこの女はっ!

「つて、おい!お前!」

そんな高飛車女に、一言文句を言ってやるつと引き止めようとするけれど、俺の声なんて、まるで聞こえていないかのように、俺とは逆の方向に歩いていってしまふ彼女

その後姿は、気のせいかな悠々と勝者を気取って見えなくもないから、さらに腹立たしい

「くっ！あんにゃろっ・・・」

苦言を呈するものの、俺は俺で、それ以上はそいつを追おうとはしない

いや、もちろん追いつこうと思えば追いつけるが、さすがにそこまでする意味はない

そもそも引き止めてどうするというのが

彼女に文句を言ったところで、目当ての商品を手に入れられるわけでもないのだし・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・むなしい」

そこには、勝者たる彼女を見送りながら、不覚にも敗北を実感している、あまりに無様な独りの男の姿があった

「くそ．．．今思い出してもムカつくぜ」

思い出すのは昨日の事

一日経ったというのに、あの失礼極まりないあの子に対し、未だに不平を垂れている俺

我ながら未練がましいと思えなくもない

おかげで、歩美との他愛無い口論にも翳りが出てしまい、危うく言い包められそうだったほど苛立っていたし

ともかく今は、結局は言い包めることに成功した歩美と、二人並んでの登校しているわけだ

「ふうん、そんなに嫌な女の子だったの？」

「ああ、一瞬見ただけで天敵だと悟ったね。普通いるか？俺と全く同じ内容の買い物をして、しかも俺を見下して勝利に酔いつつも暴言吐くような人間が」

普通いねえよそんなやつ

「あ、あはは．．．まあ、確かにすごい偶然だよね」

もう最悪の偶然だ

「まったく、どこの奴かは知らねえけど、次は必ず見下してやる」

絶対に一番安い品物を揃えて目の前で勝ち誇ってやる

そこで、捨てゼリフよろしく敗北を実感させてやる

お前なんてその程度だって、思いっきり上から目線で罵ってやるんだ

ああ、もう絶対にだ

「変な宗馬。何をそんな買い物くらいで一人でムキになってるの？  
らしくないよ？」

「買い物くらい言つな！俺が毎日生きるため、どんだけ苦労して  
ると思つてんだ！」

「何よ。そう思つんだつたら、家に戻ればいいじゃないの。ウチな  
らそんな苦労しなくて済むんだし。あ、そうだよ！そうしなよ？ね  
？宗馬っ！」

「・・・だから嫌だっ！っつの」

まったく、今日はやけに食い下がるな

どうせ手負いの熊だと思つて攻めてきているんだろっけど、俺もそ  
うは甘くない

「でも、その子って、ウチの高校の生徒なの？実は知り合いだった  
りするっ？」

「まさか、誰があんなのと知り合いなもんか。それに俺は制服だったけど、そいつは私服だったし、詳しいことは分かん」

やけにだらしない服装で、髪型がボブカットだったってのは覚えてるけど、でもそれ以外で外見にさしたる特徴はなかった気がする

まあ、さすがに見た目中学生か大学生ってことはないと思うけど

「ふうん、そうなんだ。でもそれなのに、またその女の子に会えると思ってるわけ？ そんな偶然そう簡単にはないと思うけど」

至極もつともな事を言う歩美

でも、俺の意見は違う

「いや、多分会えるだろ。だって、タイムサービスとか一番安いところまで使って買い物する高校生だぜ？ きっと俺と同じように極貧一人暮らしをしているに違いないんだ」

そうさ、きっと俺以上の貧相な生活をしてるに決まっている

きつとそうさ、そくに違いない

お前の家のワンルームには3口コンロなんてありゃしないだろ？

精々一口電気コンロだろ？

へっへ〜んだざまあみる

なんて、無意味に勝ち誇ってみるも、むなしさが募るだけだった

「でも、ホントにそうなのかな？もしかしたら家の手伝いしてたのかもよ？」

「そりゃそうかもしれないけど、でも歩美は知らないだよ。夕方時の奥様方とのあの壮絶な攻防を。あれを掻い潜るにはそれなりの修行が必要なんだ。それなのにその中で目的の一番安い品物を買って揃えるなんて、ありや相当のテダレだね」

商店街を知り尽くしている俺が言うんだから間違いない

「へえ〜、でもお母さんはそんな苦労してないような気がするけどな？」

「それこそ甘い。というか知らなすぎだ。俺の買い物物の師匠は里美おばさんなんだぜ？いやもう俺マジおばさんを尊敬してんだから」

昔、手伝いにと、おばさんと一緒に買い物に出かけて、初めてあの脚捌きや身のこなしを見たときは、それはもう体が震えたもんだっ  
たよ

「あの軽やかかつ自然な動作、あれをマスターすることが俺の目標の一つだな」

拳を握り締め、改めて決意する俺

「そ、そうなんだ。私には、ちよ〜つと無理かもね・・・」

そんな俺を見て、微妙に引いている歩美

ふん、余裕扱いていられるのも今のうちだ

この街にいるのなら、あれは必ず一度は通る道なんだからな？

「ともかく、あいつは必ずあの商店街に現れる。相手にどういう経緯が有っても知るもんかってんだ。俺は何がなんでも絶対に、昨日の決着をつけてやる」

いや、どっかのライバルキャラよろしく、負けを認めずに勝手に思い込んでるだけなんだけど

「ふん。ま、せいぜい頑張んなよ。応援くらいはしといてあげるからさ．．．って、ん？あ、あれツバサちゃんだ。おっ！っ！ツバサちゃん！っ！ん！！」

知り合いを見つけたのか、俺のときと同じようにデカい声を張り上げる歩美

「って、お前は誰にでもそんな大声で呼びかけてんのかっ？」

なんて傍迷惑な奴だ

「うっさいな、そんなの私の勝手でしょ？おっ！っ！いつ！っ！おっはよ！ツバサちゃん！っ！ん！！」

「ったくこいつは．．．」

悪態をつきつつも、その呼びかけられた子の方を見やる

その子もどつやら、歩美に気づいたらしく．．．気づかないわけも

なく、こちらに振り向いて歩いてきた

心持うんざりして見えないでもない

うんうん、よく分かるぞその気持ち

君は俺の同胞かもしれないな、うん

「・・・でも歩美が、ツバサちゃん・・・ね」

歩美は、声はでかいくせに少しばかり人見知りの感がある

おかげで昔は、いつつ俺にばかり付いて回っていたものだ

それも随分改善されたとはいえ、まだ根っこの部分で人との接触を微妙に怖がっている部分があったりする

でもそれを名前で呼ぶともなれば、恐らくは相応に仲がいのだろう

きっとそのツバサちゃんというのが、よほどの好人物に違いない

それに、俺と同じ目に合っていることを鑑みても何となく好印象を持てる

というわけで、何となく気になって、そのツバサちゃんを見ていることにした

「む」

まあ、当然だが鶉視の制服を着ていて

背は歩美よりも、ちょっと低いくらいで

髪型はボブカットで・・・

気持ち大人しめな印象・・・というよりはクールな感じで・・・

・・・何故だか、微妙にだらしなさを残す服の着方をしている？

で・・・

そんで・・・その・・・

どっかで見かけたよう・・・な・・・気が・・・？

「って、うあああああぁぁぁっ!!!!?」

「うわっ、何、急にどうしたの?」

「お、おおおおお・・・」

震える指で指差してその、ツバサという女の子を見つめてしまう

というか、睨んでしまう

「お前はああぁぁっ!!!!」

そこには見間違えようもない

昨日商店街で出くわした、俺のことをあっさりで見下しやがった、

例のあの暴言女の姿があった

「てめえ昨日の高飛車暴言女っ!」

歩美の友達に対しての第一声がそれと言つのもどつかと思つが、つい思わず口に出してしまう

が、許せ妹よ

「・・・ああ、あなた、どっかで見たと思つたら、昨日の・・・ボソッ(負け犬)」

「って、お前今また負け犬言いやがっただろ!？」

昨日に引き続きなんて女だコンチクショーっ!

「まさかいいえそんな、そんな恐れ多いことなんてこれっぽっちもまったく全然思つてなんてないですよ?高飛車暴言女だなんて言われて気にしてる訳でもありませんね。ええ本当に」

なんて嘘臭い!

「・・・ああでもまさか、まさかあなたがアユの知り合いだったなんて。ええ、それは大変失礼しました」

と思つたら、昨日とは違い下手にでる彼女

ちょっと調子が狂う

というか、これだと俺が悪者みたいじゃんか

「いえ、昨日はつい、あまりに惨めに哀れに情けなくも四つん這いになっていて同じ高校の男子がいるな」と思い見下していたら、思わずつい隠そうとしていなかった本音が口の端から漏れ出てしまっただんですよ。ええはい」

「……………ふっ」

前言撤回

これはなにか？

つまりケンカを売られていると、そういうわけなのか？

ふん、ああ、いいぜ

昨日は女の子と違って見逃してやったけど、これ以上の暴言となるとさすがに対抗手段をとらせてもらうぞ？この野郎（女だけだ）

「ふっふっふ……………」

「ふふふふ……………」

お互いを牽制し合うように笑い会う二人

かなり怖い絵柄だと思う

てかこの図って、傍目からはどんな風に見えるてしまうのだろうか

「ま、まあまあまあまあまあまあまあ、まあ〜二人とも落ち着いて、ね?」

と、二人の間に割って入ってくる歩美

でも、そうそうケンカの仲裁をしたなんて経験はないのだろう

その笑顔は見事なまでに引きつつている

「ほら、宗馬はそんな怖い顔やめてさ。それにツバサちゃんも、どうしてそんな宗馬に敵愾心むき出しなのか分からないけど、そんなのらしくないよ?ね?ね?でしょ?ね?」

それでも、必死に仲を取り持とうとする歩美

その表情に健気さというか、まあ、哀れさを覚えなくもない

「.....」

それはそのツバサという名前の彼女も同様なのか、何やら気まずそうに前髪をいじり出している

「ね?ね?ね?ここは私に免じてさ。ね?お願いお願いおねがい!」

そして早くも「ね?」と「お願い」だけで押し切ろうとしている歩美

何というか、実にボキャブラリーの少ない奴だ

それにそろそろ、その似合わない作り笑顔も限界っぽい感じ

「ね？ね？・・・ね？」

「む」

「あう・・・」

でも、そんな哀れみたくなるような顔を見ると、逆に何だか嫌な心持になってきてしまう

例えていうなら、まるで子犬でも虐めているような嫌な感覚だ

そしてそれは、どうやら目の前の「ツバサちゃん」とやらも同じ思いだったらしく

「・・・そうねごめん分かった。だから、その怯えた子犬みたいな顔はやめて？何だか、私の方がアユを虐めてるような気持ちになってきたよ・・・」

と、とても素直に謝罪した

ああ、俺も全く同じような事思ってたよ

「・・・ほ、ホント？ホントにもういい？大丈夫なの？それと宗馬もOK？いい？平気？」

何が平気じゃないかと言えば、お前の顔と言いたいところだが、さすがに口には出さずに頷いて答える

「あ、ホント？ホントだね？絶対だよ？いい？」

だが、それでも安心できないのか、それとも引き際がよく分かっているのか、再度、俺と彼女に確認する歩美

あっち向いたりこっち向いたり、ホント犬っころみたいな奴だ

思わず撫でてしまいたくなるじゃないか

そして当の本人は、俺達の困ったような表情を見届けてから、ようやく安堵のため息をつくことに成功する

「ふう〜良かったよ〜．．．も〜、ケンカの仲裁なんて始めてなんだから勘弁してよね〜」

心底ホツとした様子の歩美

てか、やっぱり仲裁は初めてだったか

まあ、いい経験したってところか

「でももう、ホントどうしたのツバサちゃん？いつもはそんなにケ  
ン力腰じゃないでしょう？」

「・・・歩美。お前ってやつは・・・」

たった今、事を治めたばかりなのに、すぐに掘り返すのか？

時々すごい神経してるよなお前って

「え、それはそのええと・・・」

やはり戸惑っているのか、何やら考え込む彼女

そして、さっきみたく前髪をいじり出している

ふむ、どうやら髪いじりは彼女の癖らしい

「えっと、ね？・・・」

「うんうん」

それでも、歩美の質問に答えようとして、恐らくは言葉を見つげよ  
うとしている彼女

どうにも歩美には逆らえない、というか、歩美には嫌われたくない  
みたいな、そんな印象を覚えてしまう

よほどに仲がいいのか、気を遣っているのか分からないが、中々の苦勞性らしい

けれど、やや能天気な歩美はさておき、彼女の今の表情には、戸惑いこそあれど、もう怒りの感情は見えない

少し安心

俺だってやっぱり、どうしたって争いごとは好きじゃない

基本的に日和見主義なのだ

でもいやまあ、歩美の前じゃ、今更怒る気もなれないのだろうけどさ

と、それでは改めて、その敵愾心の理由とやらをどうぞ

「えつとね？前にその人に、限定50名の1パック10円の卵を横取りされたことがあってさ．．．それを思い出しちゃってつい、ね．．．他にも何度か同じような目にもあってて．．．」

「え！？そんなことあったか！？」

歩美と話していたのに、いきなり口に挟んでしまう俺

てか、卵はよく買うけど、横取りしたなんてそんな俺には記憶にないぞ？

ええっ！？しかも他にも罪状あり！？んなの嘘だろ！？

「もっつ！ありましたもう絶対ありましたっ忘れるわけじゃないですか

らあの時のことっ！！もうホントあの時は悔しくて、あなたの持ってた卵を全部ぶち壊してやりたくなっただんですからっ！！」

「う．．．む．．．」

結構本気っぽい

まあ、そこまで言うのなら、あつたのかもしれない

それにもしも、逆に俺がそんなことされたら確かに同じように思っ  
だろっし．．．

けど、んゝゝゝ、あつたかなゝそんなこと？

正直思い出せない

「．．．でも、うん、それは悪かった。この通りだ、謝る」

素直に頭を下げる

本当にあつたのか分からないけど、世の中知らず知らずなんてのは  
よくあること

だったらそこは、ちゃんと謝らないと

それに、彼女もここまで言っているのだから本当のことなんだろう

だったら、やっぱり非は認めた方がいい

そりゃこれは処世術でもあると思うけど、それ以上に仁義礼智忠信

考悌はちゃんと重んじるべきだと思っし

「え？あ、うん、いや、はい．．．まあ、ちゃんと謝ってもらえたなら、私は．．．あの．．．」

一方の彼女は、急に頭を下げられたためか、逆にたじろいだ様子頭を下げてて見えないが、多分また前髪をいじっているんだろう

「だったら私も．．．その、昨日は．．．すみませんでした。それにさっきもあんな事言っちゃって、ごめんなさい．．．」

すると、どうやら彼女も頭を下げたらしく、正面のアスファルトの地面に彼女のその影がくの字に曲がっているのが見える

あ、何だ。やっぱり普通にいい子じゃないか

さっき思った第一印象は、あながち間違いではなかったようだ

俺もどうしたってそうだけど、人にちゃんと謝るって、中々出来なくなるものなのにな

「って、ん？」

何だか．．．道端で二人が頭を下げ合ってるって、かなりシユールじゃないか？

どっかのサラリーマンの挨拶でもあるまいに

つか、さっきは怒鳴りあって今は頭を下げあってるなんて、かなり

奇異な感じだし

(む、これはちょっと何だな)

と、そう思っただけで頭に上げた

そして彼女にも、その頭を上げるように促そうと続ける

「えっと、俺こそ大人気ないというか、ついケンカ腰になっちゃまって悪かった。だから、ほら、とりあえず君も頭を上げてくれ、な？」

そう言うと、「あ．．．はい」とやや控えめな口調で、そしてゆっくりとだが、その頭を上げてくれた

そうしてようやくよくなるが、お互いに改めて顔と顔を向き合っただけになった

「．．．えっと．．．その．．．」

でも彼女は、まだ気まずいのか少し目をそらして、やっぱり髪をいじっている

ん、まあすぐには気まずいか

確かにその気持ちは分からないでもないし

でもそれはやっぱりお互い様

ってことで、うん、ここはそうだな、とりあえずは．．．

「じゃ、とりあえず自己紹介でもしとこうか。な？」

「え？あ、はい・・・」

その、やや強引な話の持っていき方に、流されるままに頷く彼女さすがに無理があつたか？

でも、雰囲気変えるんならこれくらいじゃないとな？

「よしっ！じゃ俺からだな、俺は天風宗馬。鴉視の3年。元剣道部。今は貧乏受験生の一人暮らし、って、ああ、歩美のいところって言った方が分かりやすいか？」

自虐的なのはどうかと思いつつも、ちょっと茶化した言い方にしてみる

でも俺の頭じゃ、こんなもんが精々なのだ

「あ、はい。私は・・・空知、翼アユと同じ2年生で、えっと、特に部活動はしていません。あと、ええと・・・私も、その、一人暮らししています」

対する彼女は、そのだらしない服装とは違い、ちゃんと礼儀正しく、前に手を揃えてお辞儀をしていた

ふむ、やっぱりいい子だ

それに、やっぱり一人暮らしだったし、買い物関連についても納得だな

てか、自分で振つといて何だけど、一人暮らしである事を俺に教えるって、微妙にちよつと不味くね？

「ああ、そつか。じゃあ、えつと・・・空知さん、だね」

空を知る翼

うん、いい名前だと思う

苗字含め綺麗な感じが出てるし

「あ、あのっ・・・」

そこに、妙に気を張ったような声を出す空知さん

はて、やっぱり何か問題あったか？

「あの、ツバサ、で、いいです・・・」

「うえつ?」

思わず面喰らう

いや、えつと、この子はそんな、急に何を言ってる?

「えつと、その・・・私のことは、その、つまり名前で・・・呼んでほしい、かな、と・・・」

「は、はあ・・・」

そ、そういうもんか？

それが最近の普通なのか？

あれ？俺ってばいつの間にか世の中から遅れちゃってたりする？

マジか？

．．．ちよつとシヨックだ

「あ、いえ、そのええと、あまり、苗字は、好きじゃ、なくて．．．

」

そう俺を、あたかもフォローするように言いながら、その前髪をいじる彼女

ふむ、空知つてのも、いい名前だと思っけど、まあ彼女がそういうならそうした方がいいのだから．．．う？

「えつと、じゃあ、ツバサ．．．さん？ツバサ．．．ちゃん．．．ええと、ツバサ．．．」

む、何だろうな。どうもしっくりこない

どうにも違和感が残っていけない

でもまあ、あまり知らない子を名前と呼ぶってのは経験がないから当然ちゃ当然か

「あ、なら．．．呼び捨てでも、いいですよ？歩美のことは、いつもその、呼び捨てで、呼んでるみたいだし．．．」

「え？いやそれはさすがに抵抗が．．．」

さすがに歩美と比べられてもな

「あ、はい。それは、そうかもですけど．．．でも、できれば．．．」

「う．．．」

何やら、淋しげにお願いをしてくる彼女

その顔が、さっきの歩美よりも儂げで、何ていうか断れそうにないオーラがでてるといつか、正直、可愛い．．．って、いやいや何だよ？

てか、何で、そんなにも呼び捨てがいいんだ？

うむ、女の子の思考は度し難し

でもここは、仕方がない．．．と、そういうことになっておっ

「えっと．．．じゃあ．．．」

ツバサ．．．

ツバサ．．．

ツバサ

一応、何度か心の中で呼んでみる

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

む

思ったより平気そう

不思議なくらいに、自分でも自然に呼べそうな気がしないでもない

「えっと、だったら、まあ、ツバサ、で」

「あ・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

そう頷いて彼女・・・・・・・・ツバサはようやく前髪をいじるのをやめる

心なし、安堵したような顔が見えないでもない

でも、そのさつきしていた淋しげな印象だけは消えていないような、  
そんな気がする

まだ、何か気になることでもあるのだろうか？

「なあ、ツバ・・・・・・・・」

そんな顔を見て、つい話しかけようとするが・・・・・・・・

「む・・・・・・・・」

「……………」

「むむ……………」

「……………」

「むむむむ……………」

いや無理だった

もうさすがに気になって仕方ない

「……何だ歩美。その不満そうな顔は」

実はさっきからこの視線には気づいていて、敢えてずっと無視していたのだが、いい加減ウザいので、とりあえず声をかけてみる

「ぶえつつに……、ただ、さっきまでいがみ合ってたのに、何だか、きゅ……………に、仲良さげにしてるからさあ……………。二人とも一体全体ど……………したのかな……………ってさ……………」

「む」

確かにそう思わないでもない。でも……

「それは別に悪いことじゃないだろう？それを、何をそんな不機嫌にしてんだよお前は」

んな、心配性の妹でもあるまいに

「む〜．．．ふんっだ。別にそれが悪いだなんて言ってないでしょ？それよりほら、時間、結構危ないよ？いいの？」

そう言っつて、自分の携帯の表示画面を見せる歩美

「ん？」

何やら心に残るものがあるが、とりあえずその画面の時計を見てみる、と．．．

8：23

「っつてマジか！？もうこんな時間かよ？後7分しかないなんて！くそっ、思わず時間を食いすぎたか！とにかく二人とも走るぞ！いいなっ！？」

「はいはい。分かりましたよ〜っだ！ふんっ！」

そう言っつて、我先にと走り出す歩美

何故ふてくされているかは微妙だが、まあ、それなりのスピードで走っている

これならあいつの方は大丈夫だろう

俺もそれに続こうと、後を追いかけてようとする。すると．．．

(私また、結局．．．．．いい．．．)

「え？」

走ろうとしている俺に、後ろから声が聞こえたような気がして、思わず振り返って、後ろにいるツバサを見てしまう

「ツバサ？どうかしたか？」

「いえ何でも！ほら天風先輩！早く行きましょう！遅刻しちゃいますよっ？」

「あ？ああ、だな・・・」

俺の不安なんて全くの不毛だったのか、すぐさま歩美の後を追って走り出す彼女

その走りには、少しのわだかまりなんてものは見えず、いや実際、彼女は特に気にした風ではまるでないように思える

そしてツバサは、ちょっと先まで走ってから俺の方に振り返り「急ぎましょう先輩っ！」と、歩美と共に、俺を学校への道のりを促してくれていた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4281j/>

---

あなたは必ず、今の私を好きになる

2010年10月17日02時32分発行